

【2015-01-31】 ブルー・ア
ルタイトルを一杯



b-svaha

過去からの住人

次の日の朝、太陽がまだ東の水平線に顔を出すよりも早く、パナクルの樹の甘い香りで目が覚めた。

シトリンの暖かな波動を、大きな葉っぱがしっかり保温してくれたのか、一度も目覚めることなく熟睡できた。

私はパナクルの樹と黄色の石たちにお礼の挨拶を言い、次の砂浜へと歩き出した。

シトリンの岬を廻ると、次の入り江が見え始めた。入り江の中ほどは、落ち着いた緑に見える。

足元にある、それらしき石を拾ってみた。緑に乳白色を加えたような色だ。青味がかった緑やアクアも混じっている。ハートがどんどん温かくなり、それが喉の辺りにも広がってくる。

(エメラルド、だろうか...)

シグニーに意識を合わせてみると、アマゾナイトという言葉が聞こえてきた。ハートチャクラに関連し、天と地、肉体と精神など、両局面を持つものに対して、各々のよい面を伸ばしながら両者を統合し、よいエネルギーで満たす力があるのだそうだ。

シトリンの黄色が、アマゾナイトの緑のに飲み込まれほとんど見えなくなった辺りまで来ると、緑の砂浜や凧いだ波の合間に、いく人かの人たちが、泳いだり、座って寛いでいる姿が目に入った。

(この海に来て最初に出会う先客だ...)

そう思いながら乾いたアマゾナイトの上を歩いていくと、彼らの上半身は人のそれだが、下半身は魚だった。

(人魚だ...)

大人の男もいれば女もいる。年老いた者もいれば、小さな子供もいた。二メートルを越える背丈の女もいれば、五十センチほどの男もいた。体形も様々で、頭部と首に区切りのないものや、髪の高いものや短いもの、珊瑚や苔のようなものを頭に生やした人魚もいた。

一人が私を見つけると、全員の意識がこちらに注がれるのがわかった。

(彼らは警戒している...)

もの怖じする自分を励まし彼らに近づくと、私を最初に見つけた女の人魚に話しかけた。

彼女は身長一メートルほどで、長い髪を後ろで束ねていた。上半身は人の皮膚とは異なり、細やかな鱗で覆われ、下半身はしっかりした大きな鱗だった。物語に描かれているような横向きの足ひれをもっていた。頭は小さく扁平で、大きな両目の間隔は人よりも開いている。口は大きく鼻は小ぶりで小さく、唇は人間と同じ形だが、もっと硬い作りに見えた。

彼女は私の言葉を解するようだが、その唇は言葉を発するようにはできていなかった。いく色かの音声を発して私の挨拶に答えてくれたようだが、私がそれを解せないと知ると音を出すのを止め、目をじっと見ている。

(こんにちは。

あなたを見るのは今日が初めてです。

まあ、嬉しい！地球からいらしたのですね！)

という、女性らしい声が脳内に響いてきた。

彼女はテレパシーが使えたのだ。少しして、彼女だけでなく、ほかの人魚たちもそれによって会話していることがわかった。

私は改めて自己紹介をして自分のことを彼らに伝えた。みんなの警戒心が次第に解け、私が来る前の寛いだ雰囲気に戻ったようだ。

髪の長い小柄な彼女は、名をヒナといった。

私たちは、ツルツルとして壁のように大きなアマゾナイトの岩に背を持たせて、午前の太陽が海の色を次第に明るく変えるのを見ながら、思いつくままにお互いのことを語り合った。

ヒナによれば、ここにいる人魚たちは、全員、地球のアトランティス時代からやってきている。彼らは、当時の科学者たちによるDNA実験の産物だった。DNA操作によって、様々なタイプの肉体を持った生き物を生み出し、それを人間の労働力その他として利用する…。そうした創造性、想像力は、そのまま彼らの文明の優秀さ、高い精神性を証明すると信じられていた。支配階級は、彼ら自身を神々と同列に考えるようになっていたという。

ところが、実験には様々な結果が伴う。多くの失敗を重ねながら、その中のわずかを成功させるというのが、たいがいの場合のプロセスだったようだ。人魚の創造も、そんなプロセスの一つだったそうだ。

科学者らは、最初、イルカと人間のDNAを適当に掛け合わせるところから始めた。

さまざまなプロトタイプを作り、実験室の海から実際の海に放つが、どれも環境に適応できず、痛みや苦しみの末、短期間で死んでしまった。陸に住む人間を、哺乳類とはいえ水中に暮らすイルカと掛け合わせ、新たな水棲動物を創ろうというのだから、最初から相当な無理があったわけだ。イルカたち種族にとっても、相当な犠牲を伴ったはずだろう。

それでも彼らは、皮膚の形状、肺とえら呼吸の機能、雌の胎盤の位置と大きさ、排泄箇所や、水中での体重バランスや抵抗、運動性など、実験の度に一つ一つデータを集めていった。薄っぺらな平目のような腕や頭を持つもの、三メートルものジュゴンのような人魚も作られた。

それらの実験を何度も重ねた結果、いくつかの比較的安定したタイプが生まれ、実際の海的环境に適合することができた。彼らは徐々に繁殖し、世界の海に棲息するようになった。

けれども、アトランティス文明は、精神文明がその科学知識に追いつかず、周知のようにやがて崩壊の道をたどった。彼らの生命エネルギーの供給源だったセントラルシステムからのサポートがなくなり、海洋自体も廃棄による汚染物質が充満し始め、人魚たちは世界の海から姿を消したのだった。

だが実際は、ここにいる彼らのように、汚れてサポートのなくなった環境でも、生命自体の進化の力によって独自の発達を遂げ、こうして生き残ったものもいるのだった。ただしそれは、この場所のような、特定の好条件の場所に限られる。次元の隙間から、こうした好条件の理想的な環境を見つけることができるのは、百万に一つの幸運がなければ無理だという。

地球の海で暮らせなくなった彼らは、繰り返された実験によって負った、肉体と精神の深い傷と痛みを、大きく損なわれた愛、信頼、許しのハートを、このビーチで癒しながら暮らしているのだという。

私は、人間である自分が恥ずかしくなった。アトランティス文明も人間が築いたものには変わらないのだ。身勝手な人間たちは、いつも自分たちの今のことで頭が一杯なのだ。だから、自分たち以外のほかの種族や生き物たちの幸せなど、あまり思うこともない。そんなことを思ったら、自分が幸せを逃してしまうと恐れたのだろう。そんな姿は、今の私たちの文明も、自分自身も、ちっとも変わっていなかったのだ。

私は、ヒナに返す言葉もなく、下を向いていた。アマゾナイトの優しい緑が、前ほど輝いて見えなかった。

ヒナは、海草のように平たい腕を伸ばして私の手を取った。

指の中ほどまで生えた透明な水掻きがきらきら光り、三角の細い爪は、きれいな真珠色をしている。

(わたしたちはいま、不幸ではありません。私たちに与えられた運命は、それは辛く過酷なものでしたが、いまこうして生き残って幸いの地を与えられたのですから...)

ここは、私たちにとって、天国なのです。

そしていつの日か、人類がほかの種族と調和して、一つのいのちとして宇宙の星々や星座の存在たちとも仲良く幸せに暮らせるようになることを、いまも心のどこかで信じているのです。私たちの悲しい歴史は、この大なる目的のために捧げられたものなのです。みながそのように信じています。だから、あなたはどうか、悲しむのを止めてください...)

大小敷き詰められたアマゾナイトの一つ一つが、心なしか明るさを取り戻して見えた。固まっていたハートが、穏やかな緑の光を吸収し柔らかく開け始めるのを感じた。

ヒナの顔を見ると、ほらね、という風に首をかしげ、無邪気に笑っていた。おでこに張り付いた前髪が、優しく風に揺れている。

彼女の純粹さと笑顔が、私の陽気を取り戻してくれた。

最後にヒナは、私の目を真っ直ぐに見つめるところ付け足した。

(アル、どうか、私たち人魚のことをあなた方のいまの文明に伝えてください。

人類はいま、あの時と同じような、いのちにとって不幸なDNA実験の歴史に向って進み始めています。心と精神の発達に伴わない科学力が、自らを破壊し終わるまで止まることを知らない暴走する機関車であることに気づかないまま...)

私は立ち上がり、ヒナの手を取ると、しっかりと肯いた。

そして、ほかの人魚たちにもお別れを言い、アマゾナイトの浜を先へと進んだ。

太陽は、午後二時ごろの穏やかな日差しを、海と陸のすべてにきらきりと注いでいた。

歩き始めるとすぐに、入り江の中央部に達した。

そこには、サナトリウムの後方の高い山から流れてくる川が、注ぎ込んでいた。この川を辿って行けば、一番高く見える山の頂に行くことができるかもしれない。確かそこには、瀧があったように覚えている。

しばらく行くと、また別の岬が見えてきた。北へと向ったつもりだが、ここまで来ると、すでに南に向かっていることが、太陽の位置によっても明らかだった。どうやらこの場所は均等な凹凸の円周をもった島になっているらしい。医療班の入り口から来た時には、どこかの大きな陸にやってきたとしか思えず、海は一方向にしかないものだとばかり思っていた。実際は、周りは全部海で、水平線の果てまで続いているようだ。七つのビーチのうち、すでに五つを過ぎたことから、残り二つのビーチで元のクリスタルビーチに戻ることが想像できた。

次の岬を右に廻った辺りから、砂浜の色が緑から薄い青に変わり始めた。キラキラと水の青さに光るこの石たちはアクアマリンだった。優しく平和な波動をもったこの石は、第五チャクラに

対応し、天使界やスピリットガイドとの繋がりをサポートする働きがあるのだという。どちらもシグニーからテレパシーで受けた情報だ。

このあと私は、アクアマリンの岬の先端でもう一泊野宿し、さらに浜辺を進んだ。

入り江を過ぎて次の岬となったあたりには、一本の栈橋のような道が、空の何もない空間から突然現れ岬まで続いていた。距離にして三キロはあるこの白い栈橋は、空中に浮かぶ天の橋立のように医療班の庭園にまで伸びていた。私たちは六七秒でその中を通り抜けたと思っていたが、ここからの姿はとても信じられない長さだった。シグニーたち、医療班のメンバーは、この橋を調整ピアと呼んでいる。ここを通る間に、通行者の諸条件をこの世界対応へと調整するからだろう。

私は天の橋立を見上げながら下を通り抜け、女性エネルギーに象徴される直観力やサイキック能力を活性化するというムーンストーンのパールに出た。真珠のような魅惑的な乳白色の輝きを放つこの石は、第六チャクラに対応する。

孤高で可憐な白い明けの月をそのまま石にしたようなムーンストーンを満喫したあと、岬を右に廻ったところで元の水晶のパールに辿り着いた。

【2015-01-31】 ブルー・アルタイルを一杯

<http://p.booklog.jp/book/94480>

著者 : b-svaha

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/b-svaha/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/94480>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/94480>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ